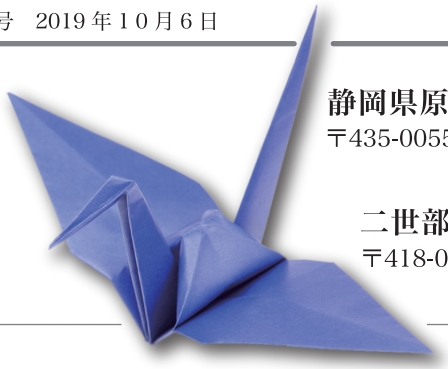
静岡県原水爆被害者の会
二世部会ニュース
編集・発行　静岡県原水爆被害者の会二世部会
2019年10月6日発行　第２１号



静岡県原水爆被害者の会
〒435-0055　浜松市中区十軒町235-4　大和方
Tel & Fax　053 - 463 - 3502

二世部会事務局
〒418-0047　富士宮市青木395 - 1　高野方
Tel & Fax　0544 - 27 - 1368

「自分史」に託した被爆を体験した父の思い

二世部会　高野 佳実

私の父は、特攻隊員として広島市宇品の暁部隊に配属され、そこから沖縄に向かう予定でしたが変更になり、福山の17中隊軍司隊に配属され、1万トン級の最大輸送船の機関砲小隊長として、フィリピン決戦に向かうことになりました。しかし、千葉の四街道にあった野戦砲兵学校の砲兵情報隊で気象を担当していたため、急きょ船舶司令部の気象教育隊人事係班長として本土決戦に備えるために広島に残り、27歳で被爆しました。

昭和34年7月26日、故杉山秀夫氏らと共に静岡県原水爆被害者の会を結成し、80歳で亡くなるまで被爆体験を語り続け、「被爆者援護法」制定と「核兵器廃絶」を訴え続けた一生だったと思います。

昭和37年　初めて原水爆禁止世界大会に参加

父は昭和20年8月6日の朝8時、公用で見習士官と共に部隊を出て比治山にある船舶砲兵団司令部に向かっていた時、司令部付近で被爆。爆心から2キロでした。被爆したときの状況を次のように語っていました。「一瞬目も眩むような閃光、あっと思った瞬間、思わず左後方上空を見た私の目に、黄色とも橙色ともいえない火の玉を見た。左の顔面が熱いと思い手をやった時、熱い強い風に吹き上げられるように身体が浮き上がり、右前方に走るようにのけぞり倒れた。その距離5、6メートルはあったと思うが、そこまでは覚えていたが、その後何分位か記憶が定かではない。気がついたとき左の頬は赤く浅い火傷でひりひりした」。そして父がよく話してくれたのは、「この位の怪我ですんだのは、司令部の営舎があったからだ」と。

原爆投下当日午後3時頃から市内八丁堀、紙屋町（爆心地）付近の救援に出動したそうです。市内一面火災が発生して中に入れば入るほど全身火傷者が累々と倒れていて「兵隊さん水をください」と哀願されたが、その声もすぐに聞こえなくなったそうです。毎日猛火と照り続く太陽の下での作業、食欲もなくなり、原爆投下後3、4日目頃から二次放射能の影響と思われる下痢、腹痛、吐き気が激しくなり、落伍する兵もいたが救護活動は止めることができない。そのうち町中で遺体の火葬が始まり、「たとえようのない臭いは今も忘れられない、ほんとうに地獄だった」と言っていました。その後9月15日、広島を後に帰還しました。父は後に、「当時放射能のことを知っていれば救護活動に入る者は、世界人類一人もあるまい」と言っていました。私は幼い頃から父の被爆体験を聞いて育ちましたが、すべて覚えているわけではなく、父が自分史を書き残してくれたことで、二世の立場で父の被爆体験を語ることができます。「核兵器廃絶の日を見ることが出来ないのが心残りだ」と言って亡くなった父。今になって自分史を残した父の思いを強く感じます。

島田工業高校生が企画した「模擬原爆」の証言映像を見て

二世部会　松本 潤朗

私は広島の被爆二世です。父親が他界した時、私の娘が言った言葉を思い出しました。「同じ日本でありながら広島と静岡は違うの？広島は8月6日の8時15分に黙祷をするのに静岡はしないの？」その娘も今は37歳になりました。学校教育で特に小学校の時の教育が大切だと感じています。8月15日の終戦記念日に島田市平和祈念式典へ行って来ました。その時に県立島田工業高校情報技術科の生徒さんが、島田に落とされた模擬原子爆弾（パンプキン爆弾）のことを取材し、すべての工程を生徒が担当し制作した29分の映像が流されました。「戦争が憎い」と言う言葉を聞き、また自分たちが伝えなければと強く思い、制作した彼らの行動を称賛したいと思います。戦後生まれの人が8割を越えた現在、今こそ過去に目を向け愚かな戦争をやった事を反省して、戦争のない世界をみんなで作っていければと考えています。